

# 佛教学研究に於ける言語学知識

大谷大学を通して見たる

香 川 孝 雄

(一)

本学卒業後、私は大谷大学の大学院に二年間在学してその学風的一端に觸れる機会を得たので、その一端を紹介して本学学生諸君の参考に供したいと思う。

大谷の文学部に於て例えそれがどんな学問を専攻しているものでも、真宗学と佛教学は必須の学科であり、又最も重要な学科の一つである。それは、大谷大学が東本願寺をバックとする佛敎の大学であるからと言う理由のみではない。初代学長であつた清沢満之先生が、その設立の精神、もしくは使命として語られた「他力の安心の決定」と言うことにも依るのであるが、更にそのことは現学長山口益博士が盛んに述べられる言葉によつて支持せられている。即ち『近代フランスの産んだ稀代の佛敎学者シルバン・レザ *Sylvain Lévi* 教授は「西洋の文化がキリスト敎を離れては理解せられず、近東の文化がマホメット敎なしには理解せられない」と同様、東亜の文化は佛敎を離れては理解せられない」と主張するが、このことは当然過ぎることであり、佛敎をバックボーンとして広く諸学科の研究が進められなければならないに拘らず、現在の多くの大学が、この様な当然なことを観過していることに深い反省が必要である。

この爲に、文学部の研究は佛教の大学に於てなされねばならない』と言う強い信念を持つて居られる。かゝる立場に立つて考える時、殆んどすべての文科科学が東洋思潮の底に流れる佛教と關係のないものはない。この様な意味から言えば、我々は非常に恵まれてゐる言わねばならない。ここに自然と佛教学の重要性が位置付けられて来るわけである。山口学長は更に、一橋大学の上原専祿教授の言を引用せられ、凡そ我が国に於て世界に誇り得る学問は文科系統の中では佛教学があるのみである。西洋史を専攻して居られる上原教授の眼からもその様に見えたのである。ここに、我々佛教学徒は強い誇りと重い責任を痛感せねばならない。山口学長が機会ある毎に強張り、激励される趣旨はこう云つた事柄であり、佛教学を専攻してゐるものは勿論、他の学科を専攻する学生の隅々に迄よく徹底してゐるのである。

(二)

次にその学風について、具体的に述べて見ようと思う。大谷大学の誇りとするものは何と言つても佛教学である。古くは、南條文雄、笠原研寿の両師から、佐々木月樵、赤沼智善師等の伝統は、現在、山口益学長を中心として、舟橋一哉、稻葉正就、佐々木教悟等の教授陣によつて受け継がれてゐる。その研究態度は、常に嚴密なる原典批判の上に立ち、こつこつ進めてはじめてその時代の佛教思想に直参すると言ふ行き方である。山口学長の主唱せられる

*Comparative method* と言ふのがそれで、當つては世界の東洋学界を圧えたフランス学派の流れを汲むものである。そして東京大学で宮本正尊教授を中心として行われた「大乘佛教の成立史的研究」と言う様にパツとしたはでな研究に反して哲學的佛教論書の原典の註と云つた研究が大半を占めてゐる。それも佛教を正しく理解する爲には、阿毘達磨や、中観、瑜伽の

如き学派の一見非常に瑣瑣な哲學的教義を系統的に研究した後でなければ不可能であるとの考慮から出發している。故に講義内容も原典中心主義であり、現在行われている主なものは、

梵文中論釋

山口 益

梵文称友造俱舍論疏

舟橋 一哉

西藏訳阿毘達磨集論

稲葉 正就

と言つた調子に毎年続けられている。これらの書物を解説する爲に必ず漢、藏両訳を参照しつつ読むのであるが、大谷大学には寺本婉雅師將末の北京版西藏大藏經の完本があつて、その爲にも大いに惠まれていると言ふことが出来る。かゝる方法による研究成果が流々と出版せられているが、それを見ても、大谷大学の學風がいかなる方向に向けられているかと言ふことが出来ると思ふ。即ち

目 称 造 中論釈 [I] [II]

山口 益

世親成業論

山口 益

世親唯識の原典解明

山口 益

業の研 究

舟橋 一哉

俱舍論の原典解明

舟橋 一哉

西藏語古典文学

稲葉 正就

等でこの他に未だ挙げることも出来るが原典研究に關するものはそれだけである。教授陣の研究がその様な方向に進んでいるから学生も多くは俱舍、唯識のいづれか及び、阿含、ニカヤ等が卒業論文の題目に選ばれている。しかし講義、演習等で追ひ廻わされる爲、自己の選ん

だ研究をする暇もないと言ふことが言える。中にはその点に異議を持つてゐる學生もあるが、しかし論文の方はさて置き、又つちりと大学で行う基礎學をやつて置くことは、よいことだと思つてゐる。

(三)

以上概観して我々は反省すべき多くのことを痛感する。今、その二三について述べて見よう。その才一は宗學であれ、佛教學であれ、基礎學を身につけることの必要性は言うまでもない。大学生と言ふ面目にかけてもあまり基礎學ばかりやるのは面白くもないであるが、それを跳び越えて現代佛教學界の盲点を解明すると言ふ如きは不可能なことである。勿論、卒業論文はわかり切つたことを書いてそれでよいと言ふのではない。やはり現在も尙學界の盲点となつてゐる問題にメスを加えて少しでも切り向くと言ふ新鮮な研究でなくてはならない。その爲には基礎から一段一段と進んでたとえそれが自分の研究分野でなくとも一應一通りのことは知つて置かねばならない。才二の問題は、語學力を身につけることを言いたい。英語は勿論、独、佛のいずれか一方は原書を読める様にし度いものである。更に大切なことで案外見逃がされてゐるのは漢文を読む力を養ふことである。佛敎書の大部分は梵・巴・藏の原典を読まねばならぬと言つても、やはり漢訳の経論や、漢字で書かれた典籍が大部分である。このことは日本人に与えられた特權であり、西洋人では非常に困難な仕事である。しかし中には欧米の佛敎學者であつて漢文に通ずる多くの學者を私は知つてゐる。谷大在学中、山口教授の中論釈を聴講に來ていたアメリカ、コロンビア大学のレオン・ハーピッツ氏もその一人であり、又、最近、龍樹の犬度論を佛訳してゐるE・ラモート教授も亦その一人である。この様に見て來ると、漢字

文化圈に育つた日本の佛教学徒が、漢文もろくに讀めない様なことでは悲しいことである。漢文と並んで梵語の知識は是非必要であり、出来得べくは更に西藏語とパーリ語のいづれかに通じ度い。特に印度學を専攻するには不可欠のものであつて、中国人の手によつて譯訳せられた書物によつて印度のことを知らうとすることは、その根本に於て間違ひを生ずる基である。しかし、中国の佛教を勉強するにしても、梵語の知識があれば望ましいのであつて、例えば慈恩大師窺基の著「唯識述記」の中に、彼に二義あり、一は如の意、二は具有の義のあることを述べてゐるが、それは、彼とは梵語の *svabhāva* のことであつて、神文法によれば、名語の語尾に *sva* を付すれば「……の如き」「……を持てる」と形容詞の意味を生ずることが記されてゐるが、ここではそのことを言つてゐるのである。このことを知らねば何のことだかさっぱりとわからないことになるであらう。最後に、間違つていてもかまわれないから、自分でこつこつと原書に當ると言うことである。最近、国訳された典籍が随分あるが、それを横に置いて読むのもよいとにかく原書に親しむ習慣をつけることが肝要であらう。

世界に誇り得る佛教學を勉強し、又、荻原雲来、渡辺海旭、望月信亨、推尾升匡と言う大先輩が残された業績は決して亡びるものではないが、更にそれを發展させ伸ばすことがなければ折角の諸師の苦勞も遺物となつて残るに過ぎない。この業績を繼いで眞価を発揮せしめるのは誰でもない佛教大学の学生諸君の双肩にかゝつてゐるのである。遠い故郷を離れて京の都、鷹陵の学び舎に於ける四年間を無駄な年回とせず、本当に価値ある年月たらしめられることを切に希望して止まない。